

ここ数年、「縁」という言葉をよく使うようになった。いや使わざるを得ない状況が続いている。今年度がスタートしてまだ2週間だが、決定的なことが立て続けに起こっている。

4月9日（木）の朝、ある方から電話がきた。校長と話したいという。電話に出てすぐにわかった。懐かしい声だった。私の中学時代の恩師であるS先生だった。もし「あなたはなぜ教師になったのですか」と聞かれたら、私はS先生のことを理由の一つに挙げさせていただく。私にとっては自分の人生を左右することになった大切な方である。それが、ありえない展開から憧れの師とこの梁川の地で結び付きが生まれるのだから、これを縁と言わずして何と言おうか。

4月14日（火）には、本校に新しいスクールカウンセラーの先生がいらっしゃった。私はこの方と面識がある。以前仕事で大変お世話になったことがある。まさか、この方が梁川高校にお出でになるとは想像できるはずもない。だが、この方は本校に来てくださった。これも縁と言わずして何と云えばよいというのか。

振り返ってみると、1年前に梁川高校に赴任したときには、梁川高校にも梁川の地にも縁もゆかりもないと言っていい状態だった。それが次から次へと人との結び付きができていく。まるで何かシナリオでもあるかのように。とても偶然とは思えない。

そこで、考えてみた。梁川に来てからの結び付きの多くが、私にとって恩人と呼べる方たちである。ということは、今までお世話になってきたのだから、そろそろ恩を返せということか。そのチャンスをいただいているということか。だんだんそう思えてきた。

ちょっと視点を変えてみると、恩師から自分の仕事ぶりを見られているとも言える。これは大変である。だからと言って成長した姿を見せなくてはなどと気負ったりはしない。ただ、明らかに何かしらの理由があって自分が梁川の地に遣わされたと考えるようになった。これを“使命”というべきなのかもしれない。あるいは、やりがいと考えるもいいだろう。

梁川に来てからの“縁”が、私の励みになっているのは間違いない。いろいろなことが偶然ではなく必然であるとしたならば、梁川高校の生徒たちと先生方との出会いもまた必然であると考えべきだろう。出会いは大切にしなければならない。出会いは生かさなくてはならない。出会いが人生を紡いでいく。

S先生は社会科の先生だった。S先生の授業はおもしろくわかりやすかった。もともと社会好きの私は、S先生のおかげでますます社会科が好きになっていった。授業中のいろいろな話もおもしろかった。その多くを今でも覚えている。

教員になってからは、仕事でお世話になることがあった。ただ、一緒に勤務できる幸運には恵まれはしなかった。思い返すと、中学時代の担任になっていただけの運の強さも私にはなかった。それでも現在では、S先生が書かれたものやつくられた資料などから刺激と影響を受けている。いつも思うことがある。S先生の存在は偉大だということである。とても越えられない高い壁であり、決して追いつくことのできない背中である。

4月9日（木）のS先生からの電話は、「さあこれから新たな1年をスタートさせるぞ」という私を後押ししてくれた。何十年経っても先生から学ぶことができるのは幸せである。恩師はいつまで経っても恩師である。